

## 満ソ国境

### 第六国境守備隊の最後

千葉県 内田正視

昭和十五（一九四〇）年の三月下旬、長い一人旅の終着駅大連に着いた。早速、工養教務主任の仮屋先生を訪ね、同校入試の手続きをとり、満鉄社員会宿泊所へ落ち着いた。合格決定後は毎日宿泊所を中心に、大連の名所旧跡を巡った。ロシア帝政時代の由緒ある官舎跡の宿舎にはよく満鉄社員が見え満州の話をしてくれた。

間もなく、現地採用者、内地組が入室し、看板も工養隊舎に変わった。

昭和十七年一月に卒業、即日、特別市の満鉄新京工事事務所勤務を命じられ、同期の機械暖房科卒の片岡君と赴任する。新京（長春）駅頭の寒さには震えあがった。

仕事にも慣れ首都の生活を謳歌していたが、仕事上の不満も出て、片岡君と大連鉄道学院予修部の生徒募集試験に応募、共に合格し、新京に別れを告げ大連に向かった。

昭和十八年三月無事に卒業、伏見台の技養第二部土木科に進学、片岡君は機械科で奉天技養に入學した。薦町隊舎に入寮する。澤田舎監が寮長だったが食事の粗末なものには閉口した。

昭和十九年二月、大連鉄道技術員養成所第二部土木課卒業。チチハル鉄道局札蘭屯工務区勤務の辞令を受ける。工務区長は平松市の佐久間先生の同期で、紹介状を書いてもらい一躍大連を後に北へ向かった。

昭和十九年六月、徴兵検査に合格、入隊を待機しながら不安な毎日を迎えて勤務していた。日本の敗戦が色濃くなり始めてきた。

昭和二十年四月、満州第六一二部隊に入隊。国境の街、瑗瑗の郊外の梁家屯にある。

瑗瑗陣地は小興安嶺の支脈の突端にあり、一見何の

変哲もない丘陵地帯であるが「北鎮台」と呼ばれる大要塞で、いくつもの丘陵に陣地が地下深くのびていた。所属中隊の守る南山陣地に立つと、蛇行する大河「黒龍江」がはるか眼下に見え、つづくシベリアの大平原は雲か霞か、茫洋たるひろがりの中に沈んでいた。激しい訓練の合間に陣地の警備を入念に行っていた。

部隊は別名「第六国境守備隊」と称し、昭和十三年創設の精銳部隊で通常「六国」と呼ばれ、ノモンハンへも出動していた。

私は歩兵第二中隊小銃班に編入され、直ちに厳しい初年兵教育が始まった。朔風のなか残雪に足をとられながらの陣地での戦闘訓練がつづき、小休止で入った地下壕の入り口に「陣地はわれらの墓場」と大書してあった。

昭和二十年七月、検閲が終了すると同時に同年兵の大半がいなくなった。突撃大隊、艇身大隊に転属されたのだ。私は数少ない中隊要員として、こき使われた。

昭和二十年七月一日付軍令第十号下令により、満洲第六一二部隊は独立混成第一三五旅団に改編された。旅団司令部は今までの北鎮台守備隊本部に置き、浜田十之助少将が新任の旅団長になった。旅団の規模は歩兵四個大隊（歩兵砲、機関銃各一個小隊配属）、砲兵一個大隊、工兵隊一個中隊、通信隊、自動車輜部隊、野戦病院、挺進大隊の大編成で、兵員は約六千人にふくれ上がった。

旅団は総力を挙げて新陣地を構築した。国境からチハル、孫呉地区に至る要衝二站部落の山中に、ソ連軍の侵攻をにらんだ防衛陣地の構築が進められていた。私達は銃をシャベル、ツルハシに持ち変え壕を掘った。時には帰營の夢を見た。その夢が瓊瑯陣地正門の衛兵勤務を命ぜられ実現した。衛兵勤務中、敵スパイ曳光弾に脅かされた。

ある時、北安の陸軍監獄から八路軍のスパイが脱走し、嚴重なる警戒をすると共に、ソ連軍侵入近しの感を深くした。

昭和二十年八月九日、旅団長閣下の作業進捗状況の視察があるというので作業に一段と熱が入った。

突如、全軍に非常呼集がかかった。「作業中止、中隊本部前庭に集合」、矢崎中隊長は「ソ連が宣戦布告してきた。黒河、環琿の正面を渡河侵攻中、直ちに帰営、陣地に入れ」敵しい表情だった。

戦争、戦争と大騒ぎの中で軍装を整え、環琿屯営へと集結した。間もなく上空に敵機。大型機を小型機二機が囲み環琿方向へ飛行、我が隊は路傍の山林に退避した。屯営は既に敵が占領しているので陣地へ向い、夜が明ける頃陣地に到着した。第二中隊の守備する南山も混乱をきわめた。留守要員は不眠不休で中隊全員の軍衣袴をはじめ、機械の搬入、武器弾薬の補充、糧秣は敵に使用されるのを防ぐため在庫全部を運ぶよう命令されたが、留守だけではその半分も運び出すことはできなかった。

一方、戦況は刻々に不利、見下ろす江岸都市黒河の市街は猛炎に包まれ、眼下の江岸監視哨もまた火の手が上がっている。敵は黒河周辺の我が軍施設を次々に

撃破して迫ってきた。迎え撃つ我が軍は、主力を環琿陣地に置き、嫩江街道の要衝二站陣地を長島砲兵少佐の指揮の挺進二個大隊、砲兵小隊、工兵小隊で固め、援軍として山神府下士官候補者隊から一個大隊が加わり敵の南下に備えた。

孫呉の第四軍司令官は、「第一三五旅団の主力は二站到置いて敵の南下を阻止せよ」と命じたが、浜田旅団長は未完成の二站陣地へ主力を配備する作戦を採らなかった。結果的にそれがよかった。我が軍の損害は少なく敵軍に多大の打撃を与えた。

環琿陣地には、開戦時避難できなかった一般邦人と軍人軍属の家族が多数収容され、いざという時に自爆の手配もされていた。旅団長夫人を先頭に夫人たちは一丸となって軍に協力、爆撃、砲撃の合間をぬい将兵に食事を届けた。

八月十日から天候激変し、両軍戦意をそがれ、単調な砲撃戦のみ。少数の敵兵が市内に潜入し、貨物廠等に放火するのが散見された。

八月十一日も雨。敵の一部が陣地南の公別拉河を渡河し、戦車を先頭に主陣地北方へ侵攻してきたが、我軍は正確な砲撃と肉薄攻撃でこれを撃退した。

八月十二日ようやく雨が止む。遠目に敵の砲列や戦車をとらえた。我軍の砲兵隊は、主力の十五榴をはじめ、十榴、十加の砲の大半を南方戦線へ移転されたばかりで、また現在の十榴、十加も南方へ送るため駅の貨車へ積み込んであったのをソ軍の侵入で急遽、元の陣地へ運び揚げたもので、わずか数門しか残っていなかった。このため反撃を控えめにし砲を守った。

私は南山陣地で引原軍曹率いる第三小隊要員として南丘陣地の一角を占領して守備についた。装備は軽機一、擲弾筒二、肉薄攻撃用十キロ急造爆雷十個、手榴弾、九九式小銃のみ。この貧弱な武器でソ連の機械化兵団と戦うのだ。頼みは旺盛な士気と大和魂のみ。高揚して行く敵愾心が高ぶってきた。

八月十二日、黒河に上陸した敵の主力部隊は、陣地正面から渡河した部隊と合流して瓊瑋市内に展開、陣

容を整え、翌十三日から本格的攻撃を開始した。十数機の敵機は急降下爆撃を繰り返し、地上からの砲弾は異様な唸り声をたてて飛来した。更に黒龍江上に集結した敵江上艦隊は東山陣地へ集中砲火を浴びせてきた。これに対し我が方は堅固な掩体壕内に避難、敵の猛攻撃もほとんど殺傷力がなかった。

一方、敵戦車集団は内陸部への侵攻を急ぎ、陣地を素通りして嫩江街道を南下していった。私のいた陣地は街道から約二キロと近いので戦車の轟音がときに激しく聞こえてきた。

敵戦車の行く手約五十キロの二站には長島少佐指揮の部隊が待ち構えていた。迎え撃つ、我軍の火砲は敵戦車に通せず、敵戦車の火砲で我軍は損害を受けた。その中を敵戦車は悠々と通り過ぎていった。このため急遽肉薄攻撃に切り換え攻撃を続行した。兵は道路脇に自分の蛸壺を掘り、十キロの急造爆雷を背負って身を隠し敵戦車が通過する前に飛び込んで自爆していった。轟音とともに戦車は停止するが再び動き出していく。命を投げた多数の肉攻兵士たち、これが戦場の実

の姿である。

二站では八月二十二日の停戦まで約一二〇〇人の將兵が多大の損害をもつとせず、凄惨な死闘を続けた。

主陣地の北鎮台は完全に包囲され、昼間は砲爆撃、夜陰になると敵歩兵部隊が陣地に迫り、白兵戦の末、その都度撃退した。我軍も積極的に夜襲をしかけた。各隊から挺進切込隊が出撃して敵幕舎へ切り込み、戦車等を爆破する等の戦果を挙げ、分捕った自動小銃を肩に帰陣した。しかし、その都度、尊い犠牲がでた。開戦前夜の衛兵司令の穴田軍曹も切込隊長として戦死された。我が中隊では五日入隊の白崎二等兵が敵戦車に肉攻を敢行、散華し、二階級特進になった。

私のいた陣地は南方に湿地帯を見下ろし、敵戦車の爆走している嫩江街道まで一本の軍用道路が通じ、距離は約二キロだ。湿地帯のせいか狙撃兵の狙撃から免れたが連日の砲爆撃のため食事のままならず、空腹と疲労がつのつていった。

二キロ先の陣内に通じる地点は、先端陣地でも最重要地点の徒溝子陣地である。死守を命令された第七中隊飯塚隊に対する敵の攻撃は、八月十六日から次第に激しくなり、彼我の銃声が絶え間なく耳を打ち、居ても立ってもいられない気持ちだった。

夜明けになると決まって照明弾が上がる。飯塚隊の切込隊の様子がかがわれた。敵は多大の損害を受けながらも攻撃の手をゆるめない。飯塚隊も戦死者続出、中隊長も遂に十九日に戦死された。

「本部伝令で、水をくれ」と駆け込んできた一等兵の軍衣は血で真っ赤にそまり、安全栓を抜いた手榴弾を持って手はブルブル震えていた。

二十日に一個小隊の援軍が駆けつけてきた時、既に全滅に近く、生き残った兵は僅か数人のみだった。

徒溝子陣地を粉碎した敵は明日にも陣内に突入する勢いだった。我が第二中隊はこれに備え、極度に緊張、武器、弾薬等を総点検、再点検した。腹が減っては戦いできないので、食事も十分にとって明日の戦闘に備えた。この日、不幸にも初年兵の福田二等兵が

敵砲弾の破片で下顎を碎かれ重傷を負った。担ぎこんだ洞窟内の仮設病院は足の踏み場もない程、傷病兵で溢れ、その呻き声が洞窟内にこだまして心が痛んだ。

八月二十一日になった。その日は朝から砲声ややみ、不思議な静かさが戦場に漂った。

我が中隊はこの日を期して敵との決戦に備えていたが敵にその動きは全く見当たらない。中隊本部の司令のないまま壕内でも戦闘できるよう待機していた。

停戦の知らせがきた。

全員一斉に壕を飛び出した。小隊長は中隊本部へ急行した。かねてから玉砕部隊と呼ばれ、明日の生命もさだかでない状況の中での停戦命令、言葉にならない安心感と喜びに天を仰ぎ大きく呼吸した。

八月十五日、終戦の大詔を受けて孫呉の軍司令部はこれを受諾、麾下軍団に打電したが、不幸にも環璣とは早くから通信途絶のため戦闘が続行、十五日以降も彼我多くの戦死者を出した。

停戦の軍使を受け入れた師団長は、八月二十二日停戦を決断され、正午を期し各陣地に白旗が掲げられた。

その後、武装解除―シベリア抑留―復員となりますが、長くなるので、シベリア抑留のことは後日改めてお話しします。

## 強制抑留の序曲 赤痢を克服し労働

三重県 茶本 光義

満州ではソ連軍が、日ソの不可侵条約を破って越境し、満ソ国境では激烈な戦闘が開始されました。我々兵隊にとっては寝耳に水でした。

その後、昭和二十(一九四五)年八月十五日、停戦、終戦となり、精銳を誇った関東軍は矛を収め、連合軍の軍門に下り、その指示にもとづいて軍命が出ました。満州では軍はもとより、多くの在満邦人もお